

韓神新羅社縁起

都努さはふ石見国邇摩郡なる大浦の水門に静まり坐す唐神新羅神

社と齋まつる神御国は、武進雄ノ大神にておはしける。

抑此御大神は伊弉諾尊の大御子、言真雲香とり詣、綾に賢きこ

もまくら、高照座日大御神の御弟なり、久方の天上に昇り姉の

大御神と、み受日有て其の受日の勝さびにあらび罪事をかかぶらせ

給ひよて、御子五十猛ノ神ならびに二柱の姫神をも師ひつつ浮渚在

曾理立して天の八重棚雲を稜威の千別てちわきて天の壁立極のみ

めくらしつつ終に、拷衾新羅国に天降坐て丘齋守が家に至ります。

されどこの国は不順凶目汚穢き風俗なればとて永るに我並が住

居るへき所ならずとて埴土をもて奇舟を造り、そに乗、皇御国に

かへり給ふ。

韓神新羅神社縁起

（つぬさはふ）石見の国仁摩郡なる大浦の港に静まります韓神新羅社と齋まつる神の御名は武進雄の大神にておはしける。

（そのこの）この大神はイザナミの尊の大御子、一言はまくも、かとりもうでも、あやに賢きこもまくら）高照らしますアマテラス大御神の弟なり、久方の天上に昇り姉の大御神と、みウケヒありてそのウケヒに勝つも、罪をかぶらせたまいて、御子五十猛神並びに二柱の姫神をひきつれて、（うきしまりそりたして）天の八重棚雲をいつのちわけてちわきて天のきはたつきはのみめくらしつつ遂に、（たくふすま）新羅の国に天降りして、曾戸茂利が家に至ります。されど、この国はいなしこめ汚き風俗なればとて、永らく自分が住むところにあらずと言つて、埴土をもつて奇舟を造り、それに乗、皇国に帰り給う。

*ウケヒある条件を出し、それでどちらが正しいかを争い、結果により正悪を決める事。

それより

夫それより從素戔雄尊は出雲の国鳥上峯とかみのみねに到り坐いた、御子五十猛命ましは猶木種みこを

まき みやおおみかみ なきから

蒔まきて御親大御神の泣枯し給ひしを、青山となして御功業みいさおこと竟おへて、

おみ

御身を隠し玉ふ、それを木ノ国（延喜式紀伊国名草郡伊曾太祁神社

めうしんおほつきなみあいなめにいなめ

名神大月波相嘗新嘗）といふ。されや。此国にもかかりし由縁ゆえよしのあ

そのみだけ いつきまつ

ななれば其御霊を齋祀れる村を、御名みなによ勢せて（五十猛、い満まは

かく

磯竹と書は、神亀年中に改られし之）という。さて進雄命は鳥上の

おおみいっ

ふりおこしやおやたに

峯より簸の河に到り大御稜威を振起八丘八谷にはひつれる大蛇を

くしなたひめ

むかひめ

平らけ国民のなげきをやめ奇稻田比賣ノ命を嫡妻として宮を造ら

すに八雲立の大御歌をうたひ給ひて後の世の歌の、のりとし給ふな

みや

みや

となへまし

り。其御舎みやは今にすさの大御舎みやとなも称座となへまして御子あまた生まれ、竟たへ

みや

ここ

はしめ

はてたま

みたま

に御身を隠したまふ。爰ここにも最初御舟を泊玉ふ所に御魂を韓神新羅

まつ

ひとしなみ

いっもみや

なきさ

大明神と祀りしかば出雲の国と平等ひとしなみに毎年御舎の前なる渚なきさに蛇

こそ

のより来るこそ、

それより素戔雄尊は出雲の国、鳥上峯に
りられた。御子五十猛命は、さらに木種を
蒔て御親大御神（アマテラス）の泣いて
枯された土地を青山となして、有功神と言
われる。み身を隠したまう所を木ノ国（延
喜式紀伊国名草郡伊曾太祁神社名神大月波
あいなめにいなめ

相嘗新嘗）と言う。されば、この国にも

かかりし由縁のあるので、その御霊を祀れ
る村を、御名によせて（五十猛、今は磯竹
と書くは、神亀年中に改られしゆえなり）
という。さて進雄命は鳥上の峯より簸の河

に到り大御稜威を振起、八丘八谷にはい廻
る大蛇をたいらげ国民のなげきをやめ奇稻
田比賣ノ命を嫡妻として宮を造らすに八雲
たつ・・・の大御歌をうたい給ひて、後の
世の歌の始めとし給ふなり。

その御舎は今に須佐の大御舎となも
称して御子あまた生まれ、そしてに御身を
隠したまふ。ここにも最初、御舟を泊たも
ふ所に御魂を韓神新羅大明神と祀りしかば
出雲の国と平等に毎年御舎の前なる渚に蛇
の寄り来るこそ、

いしなみ

*神亀三年に、好字を用いて二字に地名を
変えなさいと言う指示があった。

ここにその抓津比賣大屋津姫二柱の神に舟揚にりませし舟場を
妻津（万葉に角里又角浦ともあり、今は角津といふ。）

また、大屋津比賣神は陵を造り祀る（今大屋村是なり、松をもて御
志るしとす、そのまつ幾とせふり銚ともしらず 如此儀は青垣山

籠れる大和あるひは大三輪に鎮守ます大物主のみたまをしも、お山

の杉にそ斉祀るにてよ二柱の彦神は東にいたり給ふ。岩本に打ち

よ勢おのれくたく類波のすさまじかりければ猛き事かもと有（是宅

野と大浦との間なる猛氣也）て、ささやかなる寫を巡り（今もささ

嶋といふなる。）こなたの志満に御舟をよせて（是よりして此の嶋

を神島と言う）ゆく遙けき海面を見放ひ賜ひて、是やこの浮世を涉

る摩呂多舟岩見る海の荒き波風（此の大御歌によつて後に国の名と

も成ぬ。）と歌宇多ひたまひつつ御舟を湊にはて巖石の上に藻を敷

き息休て詔玉はく、

ここに、その抓津比賣、大屋津姫、二柱の
神が舟揚にりませし舟場を妻津（万葉に角
里又角浦ともあり、今は都野津）と言う。
また、大屋津比賣神は陵を造られる。

（今大屋村なり、松をもて御しるしとす。
そのまつ幾年過ぎたともしらず、このよう
なことは、青垣山籠れる大和あるいは大三
輪に鎮守ます大物主のみたまをお山の杉に
祀るに同じ）二柱の彦神は東にいかれた。岩
に打ちよせ自らくだける波のすさまじかり
ければ猛き事かくのごとし、（これ宅野と大
浦との間なる猛鬼なり）て、ささやかなる
島を巡り（今もささ島といふなる。）こなた
の島に御舟をよせて（是よりして此の島を
神島と言う）遠くの海面をみられ、「是やこ
の浮世を渉る摩呂多舟岩見る海の荒き波
風（此の大御歌によつて後に国の名（石見）
となりぬ。）と歌うたいひたまひつつ御舟を
湊いれ、ごつごつした岩の上に藻を敷き休
んで詔たまはく、

雄おの子か舟路になやもされて、つつきと女の童こどもか産うてむ時のいた津つきと同じさまならめ、歎息あはれ世の中のめ處よ、産こどもむとて難なやみなばこの辺津藻へつもをとりて左右手さまたてにもち心に我をおもへ、必しも浦安うらやすからしめむと誓座うけひまして敷座しまますその玉たまもを投げ給たまふける。従いまよりゆ、今の世に至るまで浦うらに伝る、蜚あまおとめ少女もら此藻もを刈とりて御守おまもりとす。斯かかる御言みことある處ところなればとて、ほめ称ねて大浦の水戸みなとと名附つけぬ。(されや此湊このみなとはこみなとによき泊みなとにしあなれば、こなたより鳥なきが鳴来りたる、貢物ことしろの舟ふねおよび商物あきものを積集つみつどひて入ると出ると、いつれたゆ其そのひまなく事代ことしろなして、うつ拍子手ひょうしの音の程やらぬも賑にぎわいし。)かくて後風静のちやかに成りにければ素戔鳴尊さすけのみことは御船みふねにて差出さしての磯いそをも巡とふらし、五十猛命いそみことははま路はまじにたどり御船みふねと濱路あうことと亦逢事ちぎを契り、山と海とに別れ給たまふ(其逢そのあふことをかたり給たまふ所を逢濱おうはまといひ、別れ給たまふ坂は神なまわかれ、今かめ別れ坂なまと諧なまれり。)

「雄おの子か舟路になやもされて、つつきと女の童こどもがお産うの時のいたさと同じさまだ、ああ、世の中の女よ、お産うになんぎをするなば、この辺津藻へつもをとりて左右手さまたてにもち心に我を思へ、必ず浦安うらやすからしめむ」と誓ちかはれて敷しまますその玉たま藻もを投げ給たまふける。それより今の世に至るまで浦うらに伝る。女めたちはこの藻もを刈とりて御守おまもりとす。このようなお言葉のある所なればとて、ほめたたえて大浦の湊みなとと名付ける。(されや、この湊みなとはこみなとによき港であるので、こなたより鳥なきが鳴き来たる、貢物ことしろの舟ふねおよび商物あきものを集めて入ると出ると、いそがしく其そのひまなく、事代ことしろなして、打つ拍子手ひょうしの音の止むことのないような賑にぎわいだ。)かくてその後、風静かぜやすやかに成りにければ素戔鳴尊さすけのみことは御船みふねにて、この磯いそを、出発し、五十猛命いそみことは浜路あうことにたどり、御船みふねと濱路あうことと、又逢またあふことを契り、山と海とに別れ給たまふ(その逢あふことをかたり給たまふ所を逢濱おうはまと言ひ、別れられた坂は神なまわかれ、今神別坂なまといわれている。)

いともいとも計難はかりがたき大御神の綾あやしきまてに奇妙御所くすしきみしわざ為なれけれ。

そがふるきを以いた戴ただき家に納むる時はもろもろの疫病えやみの氣けを受くる

ことなく、はた蛇おろちのしきたる玉藻もは産事を安らかにあらしめ、是

に彼に天と廣く、地と厚みたまのふゆき恩頼ちよろずの千万がひとつをもかかまく欲す

れど書ふみの端はしさへみるれ棹さおさすかひもなき身をかへり思ひわたれば

いよよ心の細舟の荒波にゆらぎにゆらぐを、屋やをらとりしめても硯

の海し深ければ猶なお才さい短たんき葦あしにあやなすべくもあら祢ねど康敬主のこ

かゆるよしを志しるしてよ、と求くるに、い南野なみののいなまむも心くるを

しくかくは物しつ項根突抜うなねつきぬけておそれみ、かしこみもつづり侍はべりぬ。

いともいとも計難はかりがたき大御神のあやしきまてに奇妙な御所業なれけれ。

そがふるきをいただき家に納むる時は、もろもろの疫病の氣を受くることなく、ま

た蛇のしきたる玉藻は、産事を安らかにあらしめ、ここに、彼に天と廣く、地と厚き、

恩頼の千万がひとつをもこのように欲すれど書の端さへみるれ棹さすかひもなき身を

かへり思ひわたれば、いよよ心の細舟の荒波にゆらぎにゆらぐを、やをらとりしめて

も石見の海の深ければなお才短き葦にあやなすべくもあらねど康敬主のことか。

ゆるよしを志るしてよ、と求るに、いなものいなまむも、心くるをしく、かくは物し

つ項根突抜て、おそれみ、かしこみも、つづりはべりぬ。

上の文は、林神主家に伝わる、「新羅大明神由緒記」を仁摩町大国の小林俊二先生にご指導を戴き、永見敏郎が転写した。下の文は永見の勝手読みである。

今後諸兄のご協力でより良いものになることを願っている。

平成二十三年二月吉日

*原文の書かれた時期は不明である。紙の様子などからして明治時代以前かと思える。